

中学部の実践

一人一人の生徒が主体的に活動する
ことができる授業を目指して

—生活単元学習における個別の指導計画を生かした授業づくり—

目 次

I 研究主題	57
II 主題設定の理由	57
1 はじめに	57
2 教師にとって・・・	57
3 中学部の生徒にとって・・・	58
4 授業で・・・	59
III 研究目的	61
IV 研究仮説	61
V 研究内容	61
VI 研究方法	62
VII 研究の実際	64
1 授業づくりの流れ	64
2 授業づくりの前に	65
3 授業の設計	66
(1) 生活単元学習の指導計画の検討	66
(2) 個人目標の設定	66
4 授業の展開	68
(1) 授業担当者ミーティング	68
(2) 全教師による検討	73
(3) 保護者との具体的な連携	74
5 授業の評価	75
(1) 生活単元学習の指導計画の反省	75
(2) 「連絡カード」	76
(3) 個別の指導計画へ・・・	79
VIII 研究のまとめ	80
資料 1	83
資料 2	84
参考文献	85

I

研究主題

「一人一人の生徒が主体的に活動することができる授業を目指して」
～ 生活単元学習における個別の指導計画を生かした授業づくり ～

II

主題設定の理由

1 はじめに

わたしたちは、これまでも、生徒一人一人に応じた指導の充実を図るためには、個別の指導計画が必要であると感じながら作成してきた。ところが、実際は「個別の指導計画を作成すること」自体が目的となってしまう。作成した個別の指導計画を日々の授業に活用することができていなかったのではないかと・・・。

そんな悩みを抱えながら実践を進めてきた。



2 教師にとって・・・

わたしたち教師は、生徒一人一人に応じた指導の充実を図りたいと願っている。より一人一人に視点を当てた実践に取り組んでいくためには、それぞれの生徒の実態を的確に把握し、それぞれの課題を明らかにする必要がある。しかし、実際の指導の場面を振り返ってみると、授業づくりにおける「一人一人に応じた指導の充実」の大切さは感じてはいるながらも、そのような指導が生徒にとって十分に保障できていなかったのではないかと感じる。それはなぜだろうか。

本校の中学部の授業形態を見ると、教科担当制であったり、学年を解いたグループ別での学習を進めることが多かったりして、すべての教師が、担任以外の生徒を指導する機会を多く持っている。しかし、個別の指導計画は担任を中心に作成されており、そのため学部の教師間で十分に生徒について把握できずに、「この生徒にとって何が大切か」をはっきりととらえきれないまま、担任以外の生徒の指導に当たっていたのではないだろうか。結果として、一人一人に応じた指導の場を提供することができなかつたり、生徒に応じた指導が教師間で異なつたりして、指導の継続性や一貫性が図れていなかったように思われる。

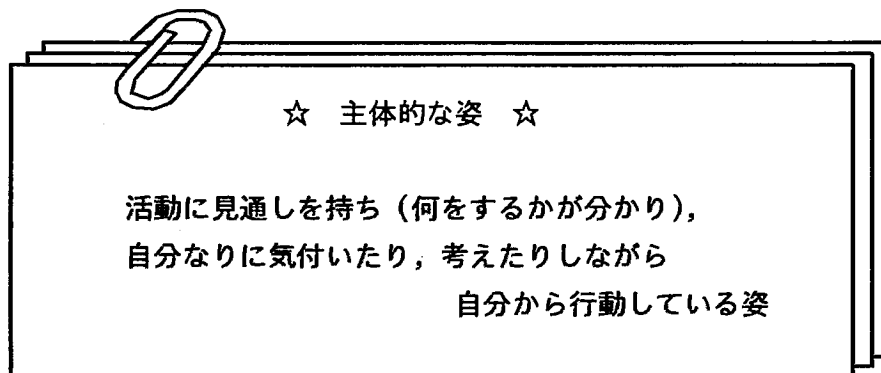
そこで、教師間で十分に検討を図りながら作成した個別の指導計画を、互いにしっかり認識し合い、それを生かしながら、より一人一人に応じた指導ができるような授業を全員で作っていきたいと考えた。

3 中学部の生徒にとって・・・

本校の中学部の生徒たちは、自分の興味・関心のあることや見通しの持てる活動に関しては意欲的に取り組む様子が見られる。しかしその反面、見通しが持てないことになると活動が滞ってしまったり、見通しが持てて自分でできる力を持っているにもかかわらず、自分で考えようとせずに、他の人にやってもらおうと依存的になってしまったりする姿も見られることがある。

また、中学部段階になると、自我の発達も見られ、自己の主張が明確になり、生徒によっては興味・関心の対象がより個性的、社会的なものへと移行してくる時期でもある。こういった生徒の個性、興味・関心、意欲などに関しては、個別の指導計画の作成を通して、一人一人の生徒の生活に十分に目を向けて把握していく必要がある。それらを踏まえた上で、生徒の個性、興味・関心、意欲などを十分に尊重して学習活動を展開していくことが大切である。そうすることで生徒はより主体的に活動することができるのではないかと考える。

ここで、わたしたちがとらえる「主体的な姿」とはどんなものか押さえておきたい。



「活動に見通しを持つ」、といっても、生徒の特性によってその手掛かりが異なってくるであろう。聴覚面からの理解が優位である生徒は、これから何をすることが分かるのか話を聞き、内容を把握することができれば取り組んでいけるであろう。一方、聴覚面よりも視覚面からの理解が優位である生徒にとっては、写真カード等を見てイメージが持てると内容を把握することができるだろう。このようにしながら、活動に見通しを持てるようにする（何をすることが分かるようにする）ことが大切である。

いずれにせよ、生徒自身が主体的に活動しようとする態度を育てていくことは、生徒にとってより自己実現的な生活の基盤となり、豊かな生活へと結び付いていくであろうと考えている。

これらのことは、学部教育目標や目指す生徒像にも押さえている内容である。

本校中学部の教育目標

すこやかな心と体を持ち、実際の生活に生かすことのできる基礎的・基本的な内容を進んで身に付け、共に力を合わせながら、実践的・主体的に活動しようとする生徒を育成する。

中学部のめざす生徒像

明るく元気で、力を合わせ、主体的に活動しようとする生徒

4 授業で・・・

今次研究では、個別の指導計画を生かした授業づくりを、学年を解いた学習集団を編成することの多い「生活単元学習」の授業を通して追究することにした。

生活単元学習とは・・・

生徒が生活上の課題処理や問題解決のための一連の目的的活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際・総合的に学習するものである。

特に中学部段階では・・・

中学部では、生徒の興味・関心が身近な人々や、初歩的な社会現象や事柄に向かいつつあることから、身の回りの人や物、集団へかかわる意欲を高めるような内容を中心に、社会とのかかわりに関する内容なども盛り込みながら、年間の単元配列を考えている。

そこで、日常生活に密接にかかわる内容については、より、実践的、実際的に取り組むことが重要である。また、学校だけでなく家庭や社会生活においても達成することが期待される内容については、具体的な手立ての在り方を、保護者とともに考え情報提供し合えるように連携を図り、学校と家庭での一体化した取組が必要となってくる。保護者間との連携も十分に図りながら、授業づくりをしていきたい。



授業参観「附養商会で働こう」の様子

では、このような生活単元学習の授業の中で、一人一人の生徒がより主体的に活動できるようにしていくためには、具体的にどのような手立てを検討していけばよいのでしょうか？

これについては、前次研究における以下の観点を踏まえておきたい。

前次研究における「主体的」に活動できるための観点

- ① 一人一人の課題を明確にしておくこと
- ② 生徒が自己選択、自己決定できる場を設定すること
- ③ 活動の予告、教材・教具の工夫、学習の場の設定の工夫等を行い、生徒が活動の見通しを持ちやすくすること
- ④ ヒントの出し方（いつ、どのように、何を）について、生徒一人一人の特性（視覚優位・聴覚優位等）に応じた手立てを考えること
- ⑤ 手立てを段階的に示せるように、複数用意することで生徒が自分で気付いたり、考えたりできるようにすること

これらの観点について今次研究でも継続して取り組んでいきたいと考える。特に、①や④、⑤については重点的に取り組んでいく必要があると考える。それは、これまで述べてきたように、

◆ 一人一人の生徒の課題について、学部の教師間で互いに十分認識し合った取組ができていなかったこと

◆ 一人一人の特性等に応じたきめ細かな手立てをもっと工夫すべきであること

以上2点が挙げられるためである。

このように、わたしたちは生徒にとって大切に考えたいこと、ねらいたいこと、また、実際の授業場面では、生徒がより主体的に活動することができるための具体的な手立ての在り方はどうあればよいのかということ、教師間はもちろん、保護者とも一緒に検討し、共通理解を図りながら、一貫した指導、継続した指導を図っていきたいと考える。

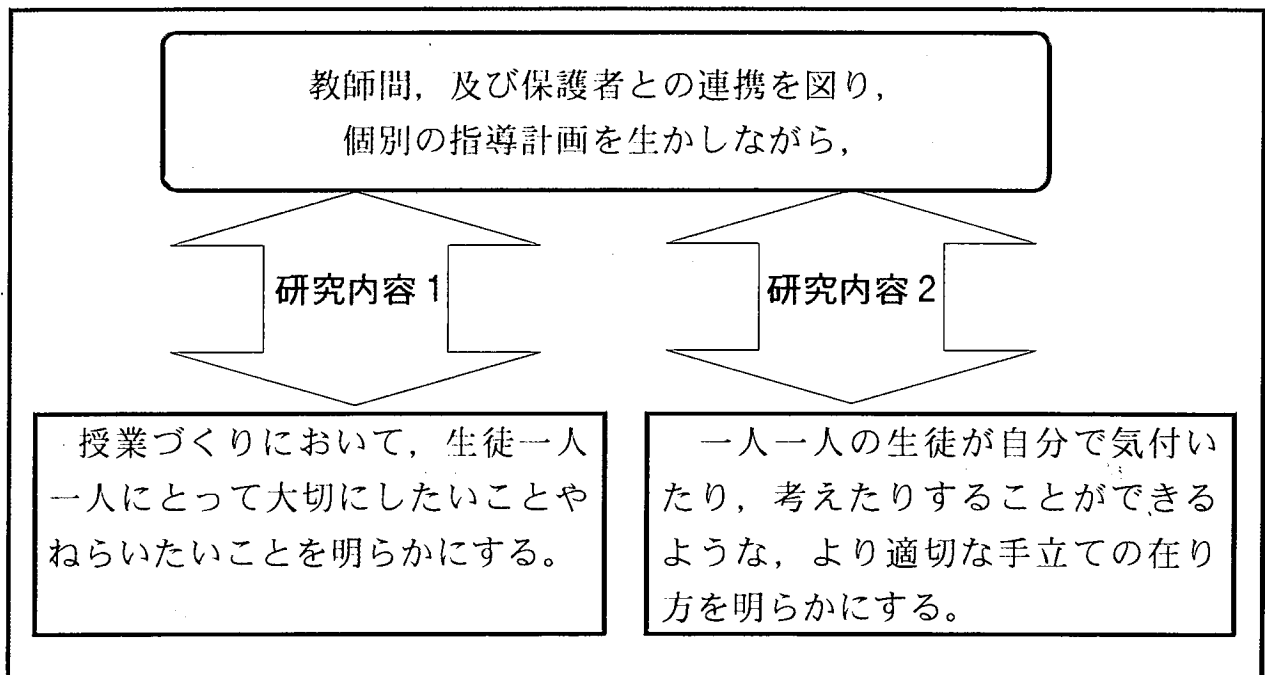
Ⅲ**研究目的**

個別の指導計画を活用しながら，一人一人の生徒がより主体的に活動することができるような生活単元学習の授業づくりをする。

Ⅳ**研究仮説**

生活単元学習において，教師間，及び保護者との連携を図りながら個別の指導計画を生かし以下のような視点も加えて検討を行い，授業づくりの実践を深めていくことができれば，生徒一人一人がより主体的に活動することができるのではないだろうか。

- ・ 生徒一人一人にとって大切にしたいことやねらいたいことを明らかにする。
- ・ 一人一人の生徒が自分で気付いたり，考えたりすることができるような，より適切な手立ての在り方を明らかにする。

Ⅴ**研究内容**

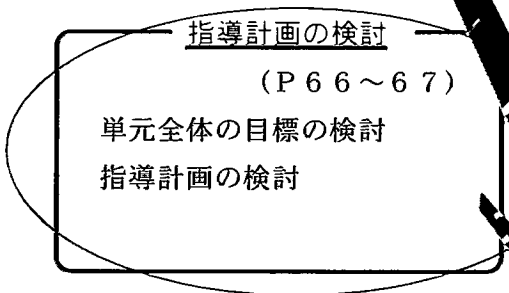
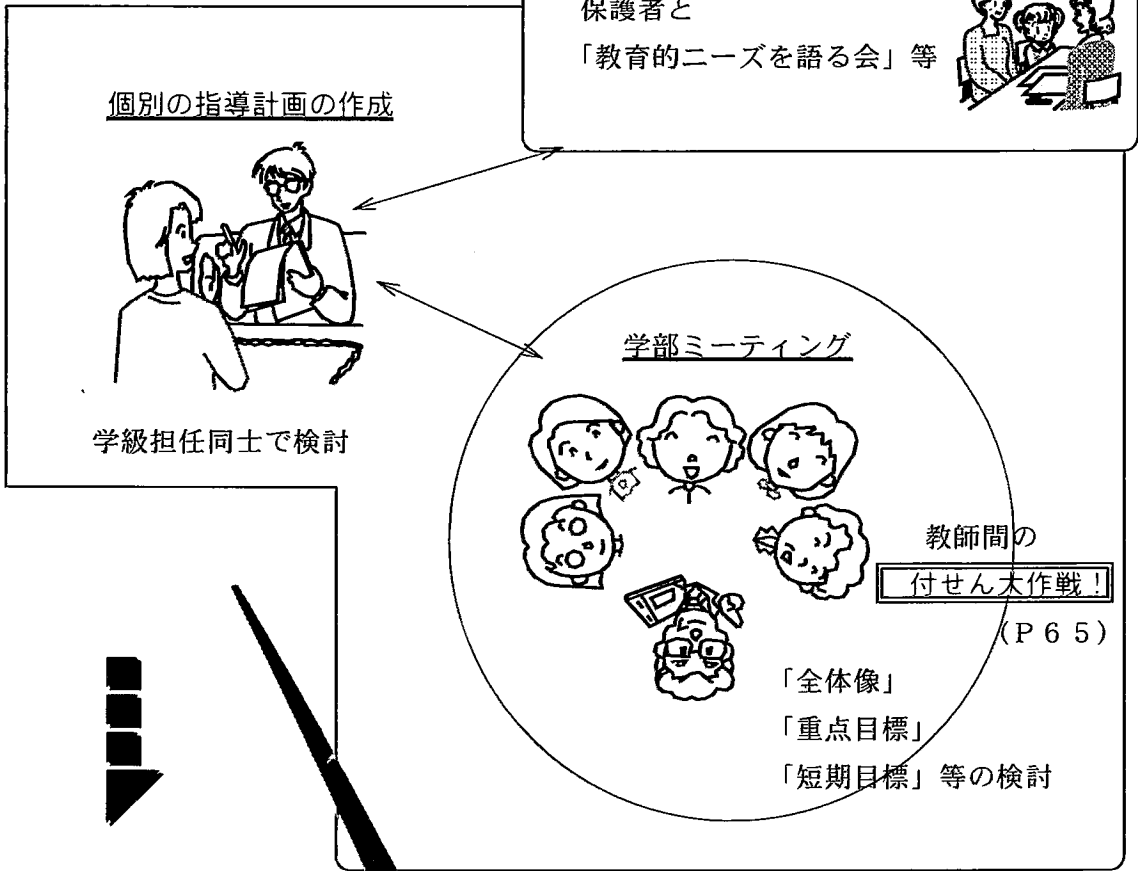
VI

研究方法

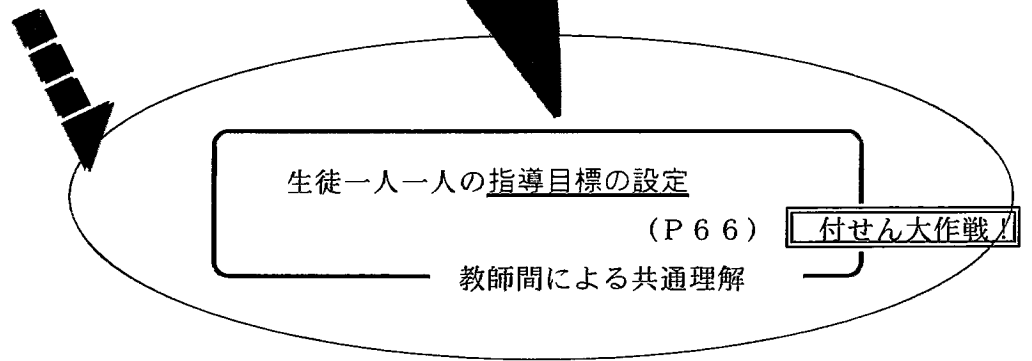
授業づくりの前に

設

計



研究内容!
 一人一人にとって大切にしたいこと
 ねらいたいことを明らかにする。
 については、個別の指導計画の作成
 段階から生徒一人一人の個人目標の
 設定に至るまで一連の流れで検討が
 行われる。付せんを活用した教師間
 の検討作業を適宜行う。



展
開
評
価

授業担当者ミーティング
個別の指導計画の全体像で述べている指導方針を参考にして
個人目標の具現化 (P 6 8)

「見通しが持てるように」
「生徒自身が気付いたり、考えたりできるように」

授業の実践
(P 6 9 ~ 7 1)

実践 ↔ 反省

研究内容 II
生徒が自分で気付いたり、考えたりできるよ
うな、より適切な手立ての在り方を明らかにする。
については、段階的な手立てに関して、教師間
の検討や保護者との連携を通して検討する。
特に、連絡カードによる評価など家庭との具
体的な連携をフィードバックさせて手立てを深
めていく。

全教師による検討
(P 7 3)

ケースワークによる検討

授業分析による検討

日常的な会話の中で

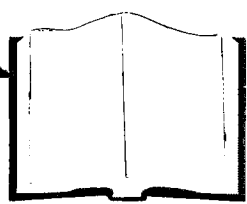
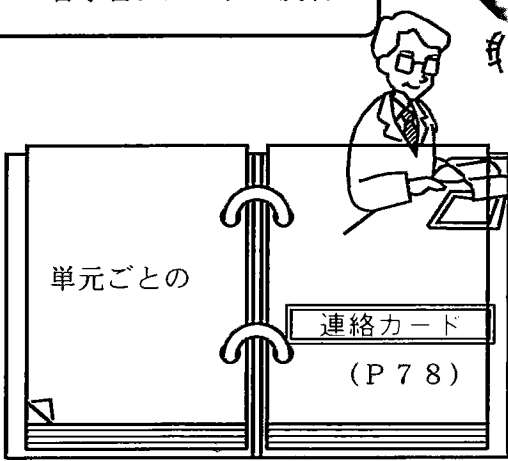
指導計画の反省
(P 7 5)

指導目標の反省
指導計画の反省
各学習グループの反省

保護者との具体的な連携
(P 7 4)

- ・連絡帳で
- ・登下校の送迎の際に

更に V T R や写真を見ながら
授業の様子を参観しながら
教材・教具を紹介しながら



個別の指導計画へ・・・(P 7 9)

1 授業づくりの流れ

図1は作成した個別の指導計画を生かし、保護者や教師間で連携を図りながら授業づくりを行っている流れについてまとめている。

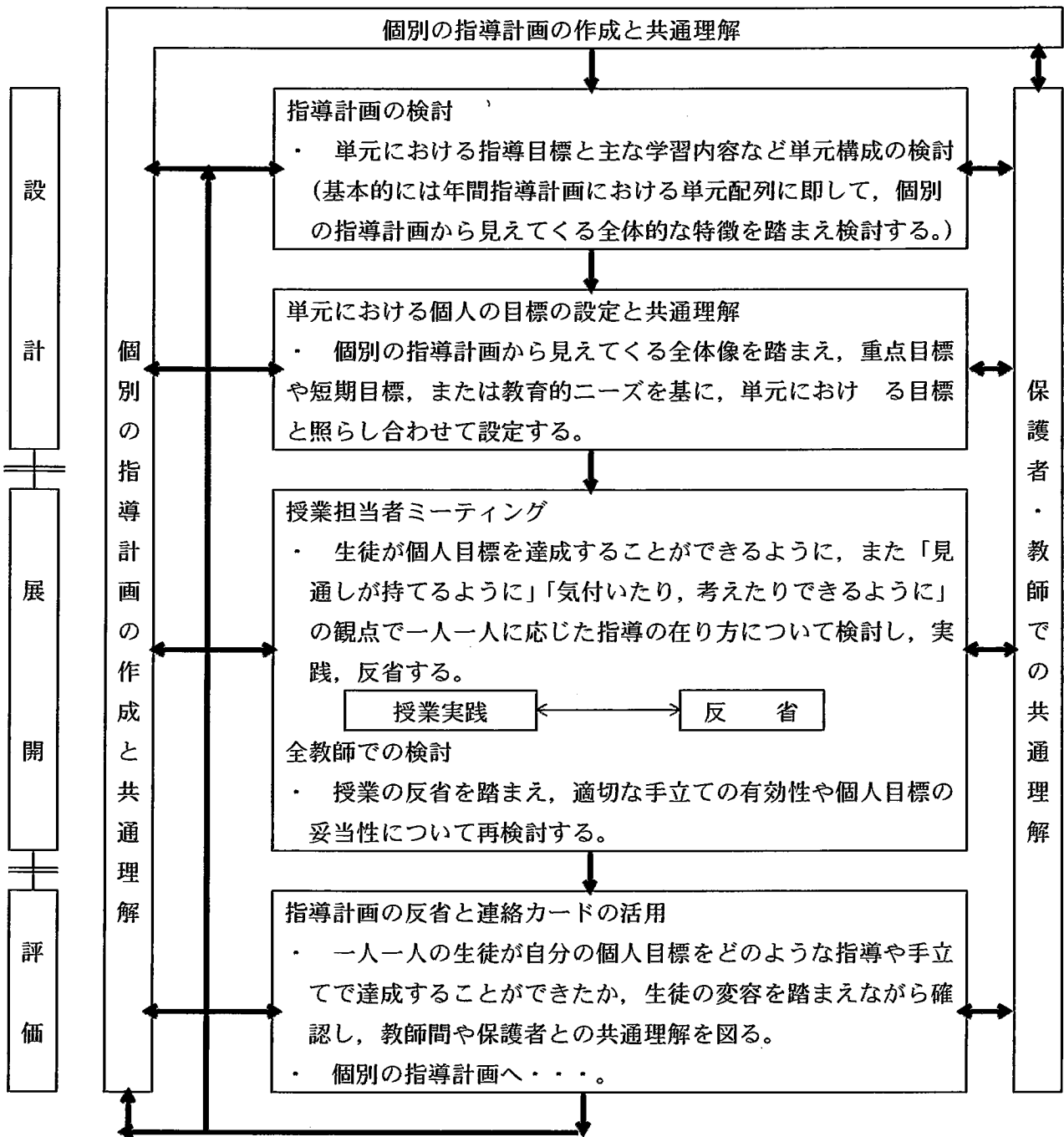


図1 授業づくりの流れ

2 授業づくりの前に

○ 個別の指導計画の作成と共通理解

わたしたちは、まず、個別の指導計画を授業づくりへ生かすことができるように、「教育的ニーズ」や「重点目標」「短期目標」について全教師で共通理解を図ってきた。そこで、「学部ミーティング」において、より積極的な意見を導き出すために次のような取組をしてきた。



「付せん大作戦！」

会議の場面で、提案されたことに対してなかなか意見を言い出しにくかったり、つい口ごもってしまったりしてしまう・・・ということもある。そこで、だれもが自由に活発な意見を述べることができるように考えたのが「付せん大作戦！」である。(資料1)

これは、担任から提案される「個別の指導計画」にかかわる提案について、全員が意見を出す、というものである。担任は提案するものを紙面にて全教師に配付する。各教師は、配られた提案を見て自分の意見を付せんに書き、それを添付して担任に返却する。返却された付せんは担任が集約し、再度担任間で検討する。みんなからの意見を受けて、見直した方がいい点は見直していくのである。担任間で意見がまとまらなかつたり、みんなで一緒に考える方が望ましいようなことについては学部ミーティング（個別の指導計画作成のシステム）の場で採り上げて、審議を深めることにした。

当初は、このような取組自体に不慣れであったり、やはり意見は書きにくいという意識もあったりしたが、全員が自分の立場に置き換えて「意見」を述べることを前提として取り組むうちに多くの意見が寄せられるようになってきた。このような方法を取ることで、これまで協議の場ではなかなか出なかった問題提起や新たな提案意見が多く出るようになった。このように、教師全員で共通理解を深めながら指導の充実を図ることができた。

（保護者と）

「個別の指導計画」の作成に当たっては、「保護者や本人の思いや願い」を十分に踏まえ、「教育的ニーズを語る会」や「教育相談」などの機会に保護者とも十分に語り合い、お互いに認識し合いながら作成している。担任は「保護者の思いや願い」を十分に受け止め、それぞれの考えを出し合い、現在の生徒の状態像や目指す姿を共に語り合い、お互いに照らし合わせながら、今、必要なことは何か考えていけるように努めている。

このように、個別の指導計画を教師間の連携と、保護者との連携の基に作成しながら、一人一人の生徒について「どのような生徒なのか」「何を大切に考えていけばいいのか」など、生徒の中心的な課題を明らかにし、共通理解を図ることができるように努めてきた。

3 授業の設計

(1) 生活単元学習の指導計画の検討

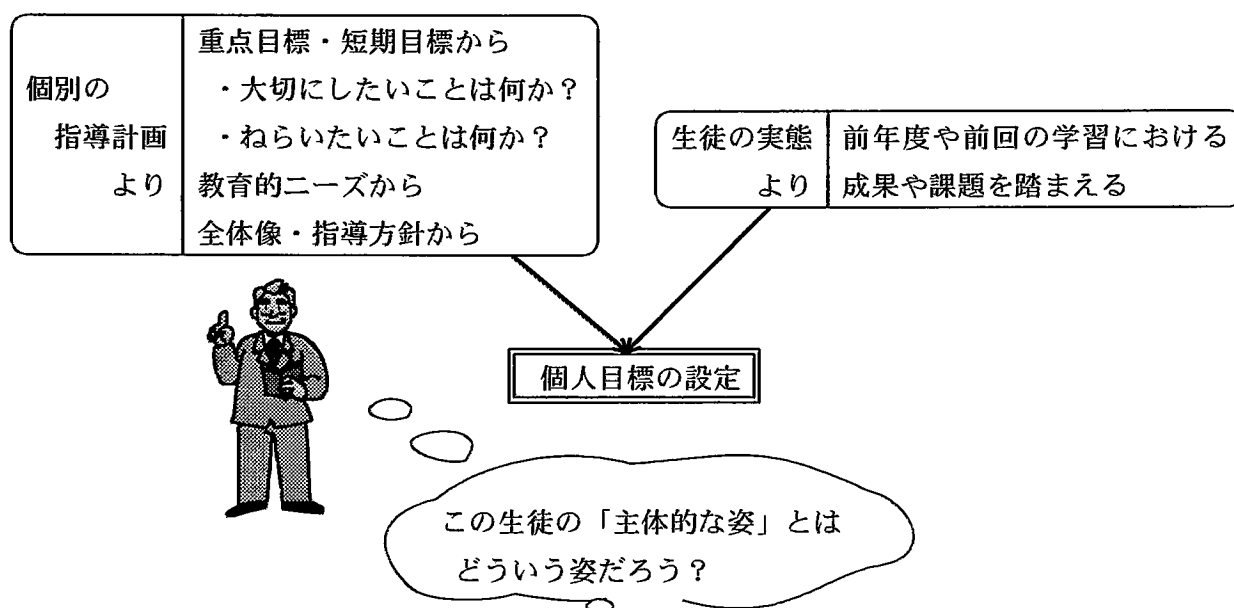
生活単元学習の授業の計画に当たっては、基本的には現行の年間指導計画を基にしながら、各単元の担当者がその年度の生徒の実態や個別の指導計画を踏まえて計画・立案し、全員で検討している。指導目標の検討では、昨年度の反省や引き継ぎ事項を受けて、本年度の生徒たちの実態や個別の指導計画と照らし合わせながら、この単元で、特にねらいたいことをみんなで検討し、指導目標を設定している。そして同時に、指導目標を達成できるような、学習内容や学習集団編成についても検討している。

このように、個別の指導計画を生かしながら検討することで、一つの単元の中で、中心的にねらっていきたいことが焦点化され、より具体的なねらいが設定できるようになってきた。

(2) 個人目標の設定

新しい単元の指導計画を検討し指導目標や学習計画が決まったら、次は個人目標を設定する。担任間もしくは授業担当者間で、個別の指導計画を生かして特に中心的にねらいたいことを明らかにし、個人の指導目標を設定し、必要に応じて複数の教師で検討する。個人目標を設定することで、「この単元において、この生徒にはこういう力を伸ばしていきたい」「この生徒についてはこのような学習場面を設定していきたい」「この目標を達成することができるためには、このような手立てが適切なのではないだろうか」など、より一人一人に応じた学習場面の設定について、考えていくことができるからである。

個人目標の設定について



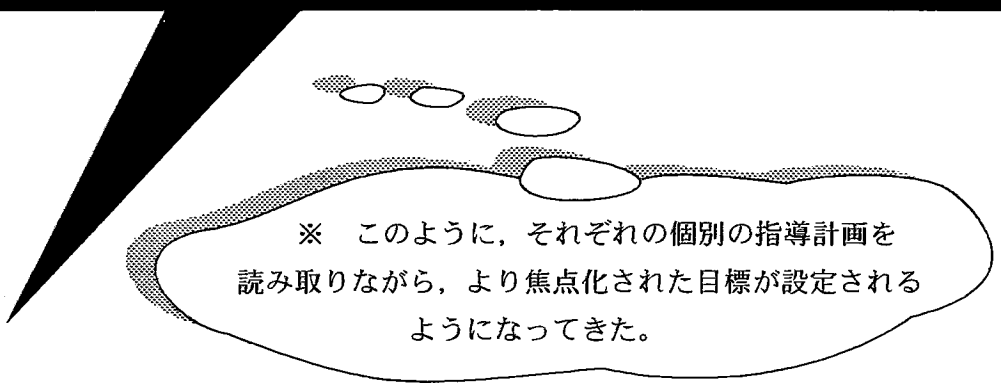
「こう変わってきた！ 目標の検討」

※ 「なかまの家に泊まろう」や「かいもんキャンプへ行こう」の場合

これまでの宿泊に関する学習では、「集会係」「レクリエーション係」「キャンドルサービス係」など、いくつかのグループに分かれて、友達同士のかかわり合いや協力、役割分担や役割意識などにねらいを当てて取り組んでいた。しかし、本年度の生徒の個別の指導計画を見ると「自分のことは自分でできるように」「できることを最後までする」などの課題や目標が多く挙げられていることが分かった。そこで、より身辺処理面に重点を当てて指導目標や指導の場面を設定してきた。

ただし、個別の指導計画を見て「友達とのかかわり」や「協力」「役割意識」などの課題や目標が重点的に挙げられる生徒については、それらに即した学習活動を設定し、授業の中で対応していくことにした。

また、個人目標設定に当たっては、単元の学習を通して、「こんなふうに主体的になってほしい」という、具体的な姿をイメージしながら検討していくことにした。しかし、実際に一人一人の個人目標を一覧にして書き表してみると、各学習グループによって個人目標のとらえ方がまちまちだったり、表現が具体的ではなかったりした。また、生徒によっては、具体的な目標を立てることが難しい生徒もいた。しかし、試行錯誤する中で、個人目標は、この学習を通して「こんな主体的な姿になってほしい」と思い描き、その姿を想定し（目指し）て、それに近づけるようなねらいを立てようということをお互いに認識し合うことができた。また、ここでも、「付せん大作戦！」を取り入れるようになった。

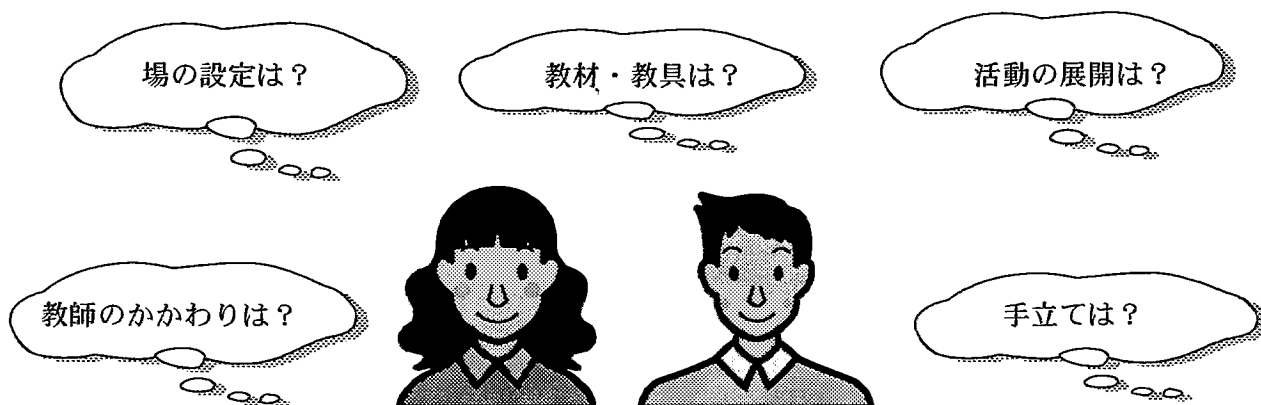


※ このように、それぞれの個別の指導計画を読み取りながら、より焦点化された目標が設定されるようになってきた。

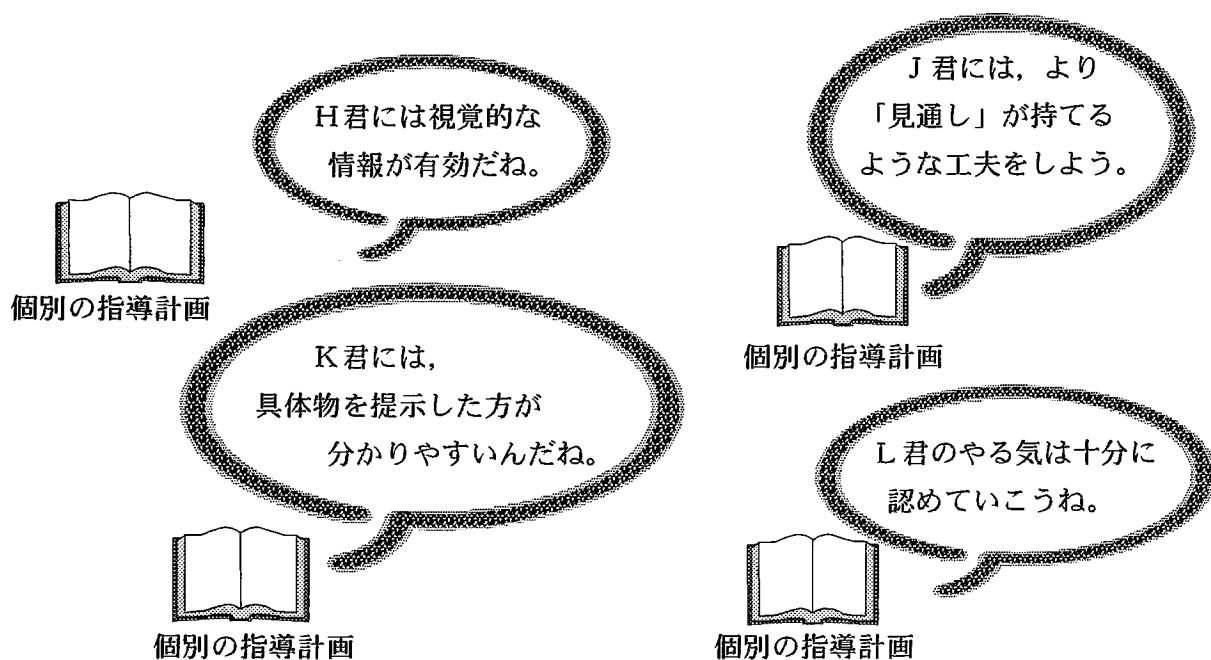
4 授業の展開

(1) 授業担当者ミーティング

設定した個人目標を、いつ、どこで、どのようにして達成することができるようにすればいいのか、どのようにして、より一人一人に応じた指導をすればいいのか、個人目標の具現化について、授業担当者ミーティングを通して検討し、実践へつなげてきた。



生徒がより主体的に活動することができるようにするためにはどうすればいいか、ということについて、わたしたちは授業担当者ミーティングを通して検討している。中でも、個別の指導計画の「全体像」の欄に述べている「指導方針」は、具体的にどのような指導をすればよいか、どのような手立てが有効か、など検討する際の参考資料となり、実践へつなげることができる。



実際の指導に当たる際に、わたしたちが特に大切にしていることは次の二つである。

見通しが持てるように

生徒自身が気付いたり、考えたりできるように

見通しが持てるように

生徒が「やってみよう」「やってみたい」と意欲的に活動に取り組んだり、興味・関心を持って活動に取り組もうとしたりすることができるように、わたしたちは「見通し」を大切にしていきたいと考えている。

今日は何をすればいいのかな？

僕はどうすればいいのかな？



よく分からないから……できないぞ！！

見通しが持てない場合

しかし、自分のすべきことがしっかり分かると……



こうすればいいんだな。

ふむふむ、分かったぞ！

よし、できそうだ！ やってみよう！

見通しが持てた場合

また、生徒によっては、同じ活動の繰り返しの中で、自分のすべきことが分かって、一人であることができるようになる生徒もいる。そのような生徒についてはできるだけ、手続きの分かりやすい活動を設定したり、同じ活動を何度も経験することができるようにしたりして、見通しを持つことができるようにする。



何回もやったからバッチリだよ。一人でもできそうだ！

見通しが持てた場合

このように、生徒自身が自分のすべきことについて見通しを持ち、より自分でできることが、わたしたちが考えている「主体的な姿」へつながるといえる。

生徒自身が気付いたり、考えたりできるように

もうひとつ、わたしたちが大切にしている観点に「気付いたり、考えたり」することが挙げられる。生徒がより主体的に活動することができるために、一人一人が、より自分自身で気付いたり、考えたりすることができるようになってほしい、と願っているからである。そのためにも、「段階的な手立て」を中心的な手段として取り組んでいる。

「段階的な手立て」?

これはどうすればいいんだろう・・・?

彼女はどこでつまづいているんだろう？ しっかりと見極めなくては・・・。

やっぱりできないよ・・・

ここでつまづいているんだな。じゃあ、少しヒントをあげてみよう。

う～ん・・・。こうすればいいのかなあ・・・。でもやっぱりできないなあ。

よし、じゃあ次のヒントだ。しっかり自分で考えてくれよ。

もしかして・・・。こうすればいいのかな？ やってみよう！

できた！ よく自分で考えたな。頑張ったぞ。

このように、生徒がじっくりと自分自身の力で課題解決することができるように、わたしたちは生徒の状態をじっくりと見据え、生徒が自分自身の力で気付いたり、考えたりする状況を確保しながら、一人一人に応じた手立てで段階的にフォローしていきたい、と考えているのである。

また、この「段階的な手立て」を考える際に、一度にたくさんのヒントを出してしまったり、生徒一人一人の特性を十分に踏まえた手立てになっていなかったりして、生徒を混乱させてしまわないように、より一人一人に応じた手立てを図りたいと考えている。

「一人一人に応じた手立て」?

視覚優位のM君へは・・・。

「言葉掛けだけでは十分に伝わらないことが多いので・・・」



- ① カードを準備しておこう
- ② 実物を示してみよう
- ③ 教師のモデルを見せよう

この、①番目の手立てひとつを考えてみても・・・

- 「文字カード?」「絵カード?」「写真カード?」
・・・M君は、どのカードが分かりやすいかな?
- 「直接的に?」「間接的に?」
・・・直接M君に見せなくても、みんなに見えるようにすれば、M君は自分で気付けるかもしれないね。
- 「同時的に?」「継次的に?」
・・・一度にたくさんの情報が入ってくると、M君は混乱してしまうかもしれないね。

このように、一人一人の特性に応じてきめ細かな対応ができるように、生徒一人一人に応じた手立ての在り方を検討し、工夫してきたのである。



「こう変わってきた！ 学習計画表！」

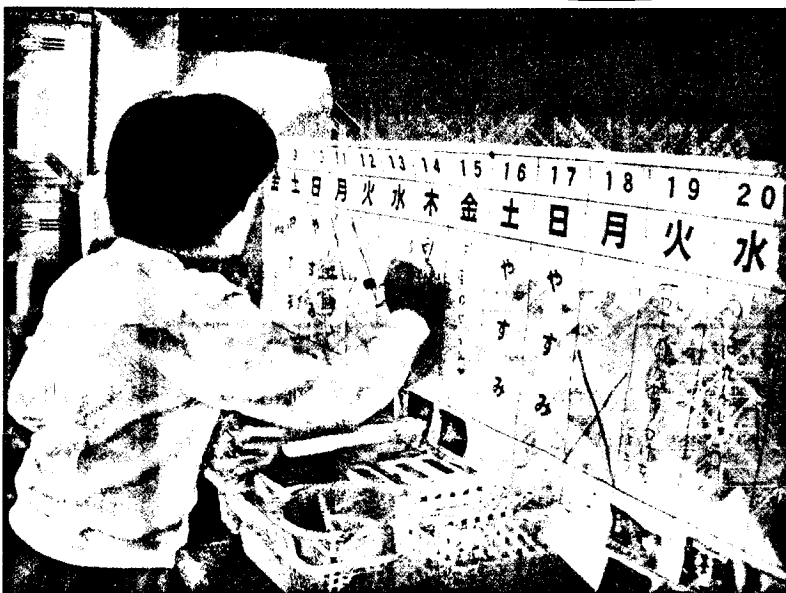
中学部では、生徒が見通しを持って学習に取り組めるように、全ての単元で導入時に、学習計画表を使って単元全体の学習の流れについて確認している。

これまでの学習計画表は、一枚の紙に学習内容ごとに「日時」と「学習内容（写真付き）」が書かれたカードで、教師が中心的に作成し、日めくり式にして、生徒と一緒に確認しながら利用していた。しかし、生徒にとっては、「いつ」「どこで」「何をするのか」の3つの情報が分かった方がより分かりやすいこと、また、日めくり式ではなく、カレンダーの形式で、学習の本番（宿泊の日や行事の日）までを見通した学習計画表の方が、単元全体の見通しが持ちやすいことなどから、この形式に変えてきている。

作成も、自分たちで写真カードを張り付けたり、学習内容を書き込んだりして作っている。作成しながら教師の働き掛けにより、「あれもしないとね」「こんなこともしようよ」と相談する姿も見られるようになった。また、毎時間、終わった学習には、「×」を付けていったり、下校の前に明日の学習を確認したりして、学習計画表の活用度は高くなってきているといえる。

しかし、この形式がすべての生徒に有効な情報だとはいえない。生徒によっては、学習内容が分かるような写真（絵）カードを提示したり、直接、月ごとカレンダーに書き込んだりしながら、一人一人に応じた対応をしている。

このように、「見通し」「気付いたり、考えたり」
という視点を大切にした授業づくりを心掛けている。



(2) 全教師による検討

わたしたちは、生徒がより「見通しを持って活動してほしい」「自分自身の力で気付いたり考えたりしてほしい」と願っているが、実際の指導の場面では、生徒が考えている時間にもかかわらずそれをじっくりと待てなかったり、つい急がせてしまって必要以上の手立てを図ってしまったりすることが少なくなかった。そこで、生徒の主体性を引き出すための指導方法の在り方について、以下のような場を通して相互研修を深めている。

ケースワークによる検討

ある生徒の、ある授業における活動場面を想定し、その生徒が「気付いたり、考えたりしながら」具体的な行動目標を達成することができるための手立てや、その有効性について話し合い、共有し合うことができるようにした。このとき、より多くの手立てを出し、共有することができるようにした。このような検討を通して、具体的な生徒の様子を想定してその行動について分析したり、具体的な手立てについて話し合ったりすることができた。

授業分析による検討

対象となる生徒の授業を、VTRに記録し、それを見ながら、生徒が「この時間の具体的な行動目標を達成することができたか」、「気づき、考えることができたか」、「教師はそのための有効な手立てを提供することができたか」という視点を持って、学部教師全員で分析した。その中で、教師自身が、授業の考え方、生徒の見方に気付いて、それを教師間で共有することもできた。また、次時の授業計画や指導につながる情報を共有したり、家庭との連携の在り方について具体的に話し合ったりすることができた。

その他（日常的な会話の中で）

「〇〇君は、こんなことができたよ（できるようになったよ）。」「今日はこんな写真を使ったら分かりやすかったみたいだよ」「〇〇さんには、どんなやり方がいいのか悩んでいるんだけど…。いいほうほうはないかな？」など、生徒の変容について語り合ったり、指導における悩みなどを気兼ねなく相談したりできる雰囲気大切にできた。担任、担任以外にかかわらず、中学部のすべての生徒について日常的に話題にすることが増え、授業の様子だけでなく日常生活の様子について情報交換したり、手立ての方法について話し合ったりするなど、生徒の全体像や細かい実態について、より共通理解することができるようになった。

このように共に授業の反省をする中で、教師のそれぞれの専門性を生かしたアドバイスを出し合うことで適切な手立ての有効性や目標の妥当性についても再検討し、次の学習に生かすことができた。

(3) 保護者との具体的な連携

このような研修を深める中で、同時に、家庭との具体的な連携の在り方についても深めることができた。わたしたちは日々の連絡帳のやり取りで伝え合ったり、登下校の送迎の際に、直接会って話をしたりと、生徒たちの様子などを伝える機会はある。しかし、それだけでは「十分に連携が図れている」とは言い難い。

わたしたち教師の願いとしては、

学校で取り組んでいることは、家庭でもできるようになってほしい。
生徒が学校で主体的に活動している姿は、同じように家庭でもそうであってほしい。
そのためにも、学校と家庭で共通した取組ができるようになりたい。

・・・という思いがある。



しかし、実際には

「どうして、授業でこういうことをするんですか？」
「家では、自分でしないんです」
「家では、つい親がやっけてしまいます」

・・・という意見も多い。



それは、活動のねらいやその意味が十分に伝わっていなかったり、自分でする（できる）状況づくりができていなかったりするためではないかと考えた。

そこで、

- ・ 生徒の主体的な姿を共に思い浮かべよう。
- ・ ねらいについて十分に伝え合い、共通理解を図ろう。
- ・ 取組や手立てを具体的に伝えたり、共に考えたりしよう。
- ・ 自分でする（できる）状況づくりを共に考えよう。



・・・など互いに認識することができた。

そのためにも

VTRや写真を一緒に見ながら説明する
実際の様子を参観してもらったり、授業に参加してもらったりする
写真カードや補助具など、実際に使った教材・教具を紹介する

このような機会を増やすよう心掛け、共通理解を図り共に納得しながら取り組めるようにしていきたいと考えている。

5 授業の評価

(1) 生活単元学習の指導計画の反省

ある単元の学習が終了したら、指導計画についての反省を教師全員で行う。

○ 指導目標の反省

《指導目標（全体）の設定は妥当であったか？》

単元開始前に設定した指導目標が、学部生徒たちの中心的なねらいとして適切であったか、個別の指導計画を反映させていたかどうか、指導目標設定についての反省をする。

○ 指導計画の反省

《指導目標に迫れるような学習の大まかな流れは適切であったか？》

指導目標に即した学習活動が展開され、また授業時数や学習集団の編成は適切であったかなど、全体的なことについて反省する。

○ 各学習グループごとの反省

《指導目標に即した学習活動を展開することができたか？》

各学習グループにおける生徒の目標達成度や変容（成果と課題）を報告し合い、また、有効な指導や手立てについて情報交換し合い、共通理解を図る。

また、年度末には、単元の配列や実施時期などについても再検討していく。

「こう変わってきた！ 授業の評価」

これまで評価では、指導目標の反省や指導計画を反省し、その反省点や検討課題を次の学習や次年度への学習に引き継いできた。また、学習を通しての生徒の変容（成果）や課題を確認し、次の学習や次年度への学習に生かしてきた。

しかし、個別の指導計画を生かしながら授業づくりをしている中で、保護者とも一緒に具体的に評価し合い、共通理解を図りたい、という思いから「連絡カード」を作成することにした。連絡カードで生徒の変容（学習の成果）とその手立てを記入して確認できるようにした。また、保護者からの感想や意見を記述する欄を取り入れた。ここで保護者から寄せられた感想や意見、質問などについてもお互いに認識しておき、生かせることについては次の学習へ生かすようにした。また、保護者と共通した具体的な取組ができた例や、具体的な連携が図れた例などお互いに挙げ相互に認識し合うことができた。

(2) 「連絡カード」

評価を十分に行うためには、単元や一単位時間ごとの明確な指導目標の設定、具体的な指導計画及び実践、活動中の様子や活動終了時の変容に関する十分な情報の獲得が重要である。そこで、中学部では、単元終了時の記録に「生活単元連絡カード」を作成し、活用することにした。

これは、授業担当者と担任が共に作成し、作成後は学部教師全員で、全生徒の「連絡カード」について共通理解及び、検討を図るものである。そして、保護者にも伝えるという役割を持つことから、分かりやすく明確な記述を心掛けている。また、学校でもコピーを保管することで、次の単元や次年度の学習における引継ぎ資料としても活用することができ、記録の蓄積をすることができる。

「 利用価値十分！ 連絡カード 」

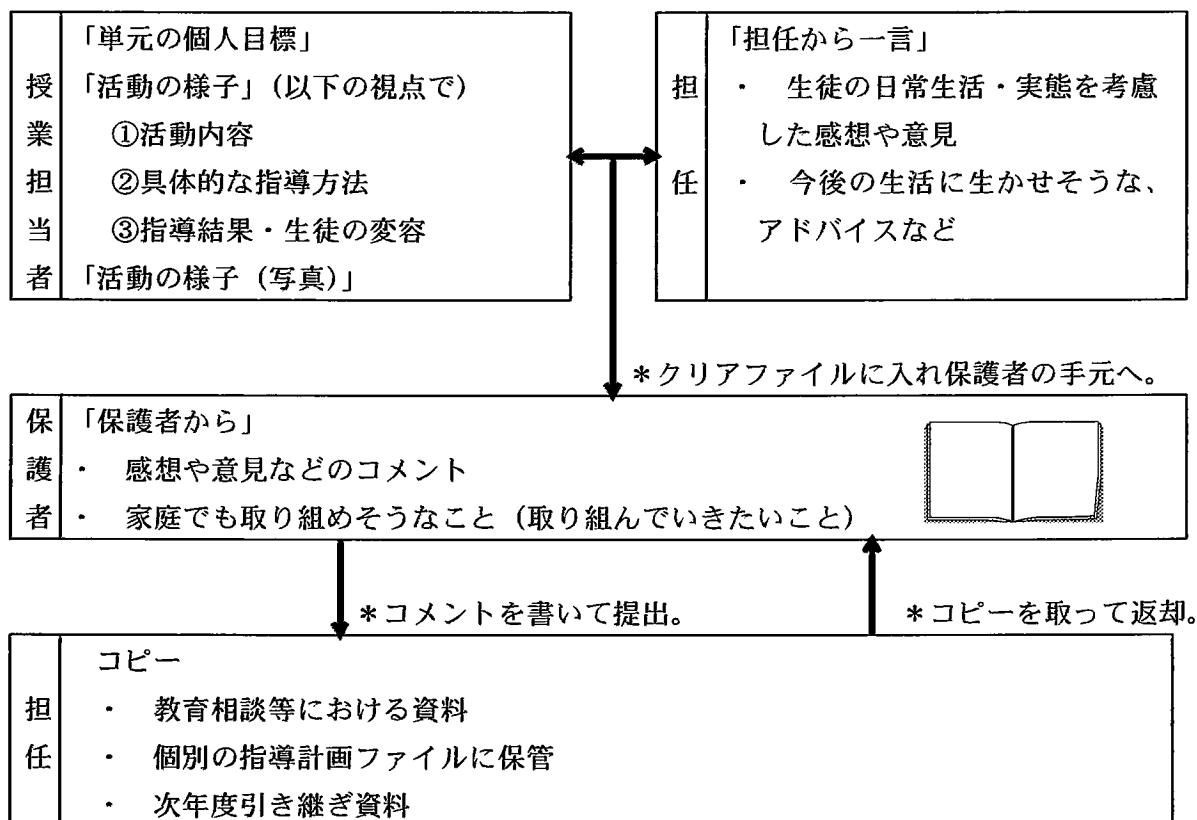
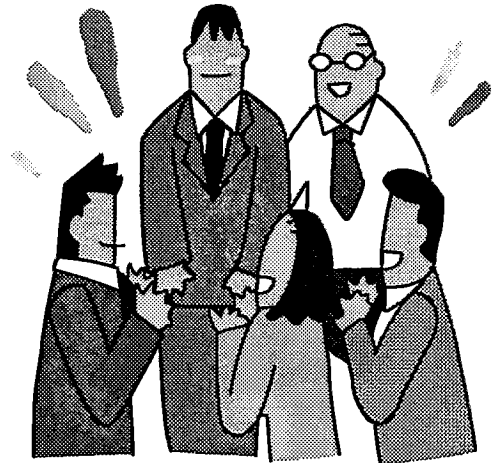


図2 連絡カードの仕組み(資料2)

○ 教師間で

教師間での共通理解が十分に図れていないと、評価を生かした次への取組ができなかったり、保護者への十分な説明もできなかったりする。そこで、作成された「連絡カード」を基に、生徒の成長や発達を共通理解する機会を作った。同時に、個人目標の妥当性や指導方法の適切さなど、教師側の課題も話題にすることで、次の単元や、次年度の取組へと生かせるような評価の在り方を探ることができた。

今後、個別の指導計画における「重点目標」や「教育的ニーズ」などについても、目標の妥当性や内容、具体的な指導方法・支援等を再検討することができるようにしていきたい。



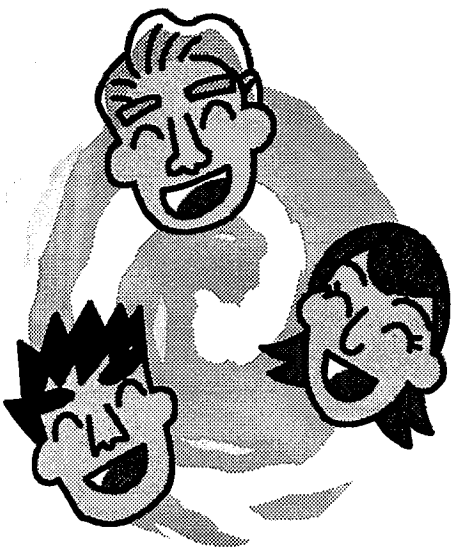
○ 保護者と

それぞれの生徒の課題について、学校と家庭とで共通した取組ができることはとても重要なことだと考える。連絡帳や、登下校の際に話す機会を通して、日常的な情報交換はしているが、もっと具体的に取組を伝えていきたいという思いから、単元ごとという短いスパンで、より具体的な情報が書かれた「連絡カード」を教師間だけではなく、保護者へも提示することにした。

次ページの「保護者の意見」にあるように、保護者にもなかなか好評である。具体的な状態や支援の方法について共通理解できるので、日常会話や教育相談の場面でも、より具体的に情報交換したり、指導の手立てについて一緒に考えたりすることができるようになった。

また、保護者が取り組んでいきたいことなどをコメントとして記入してもらい、手元にあることで取組への意識付けを図ることができた。

このような、学校と家庭の一体的な取組を通して、より生徒の主体性を引き出すことができるようになるのではないかと考える。しかし、実際には、取組の意図が十分に伝わらなかったり、具体的な手立てについて共有することができなかったりすることも少なくない。今後、更に保護者との連携を深められるような具体策を、検討していく必要があると考える。



ここで、連絡カードについて寄せられた保護者の意見を紹介する。



「大好評！ 連絡カード」



* 楽しみ！

「分かりやすく書いてあるので様子がよく分かり、毎回カードを見るのが楽しみです。」

「おじいちゃんやおばあちゃんも見ています。」

「写真付きなので子供と一緒に見ながら話を聞いたり、頑張ったことを褒めたりすることができます。」

* 「あゆみ」として！

「ファイルに入っていて手元にあるのでいつでも読み返すことができますね。」

「来年の学習の様子と比べることができそう。子供の変容が楽しみです。」

「・・・実は、これまでのようなぎっしり書かれた文章だけのあゆみは、あまりよく読んでいなかったんです。このカードなら読む気になります。」

「アルバムみたいに、成長の記録として長く保存できますね。」

保護者からはこのような意見を聞くことができ、なかなか好評である。連絡カードを使って更に教育相談などで保護者と共に具体的な取組について考えていくこともできた。また、授業参観などの機会に実際の指導場面を見てもらったり、授業に参加してもらい指導の場면을共有し合ったりすることで、学習の様子や手立てなどについて、ますます具体的に伝わりやすくなってきた。



このように生活単元学習で取り組んだ「連絡カード」が、保護者にとっても「分かりやすい」と好評だったこともあり、授業の評価をそのまま「あゆみ（通知票）」として通知できるように、現在、他の指導の形態についても同様の評価表を作成し、あゆみにしている。これに個別の指導計画の書類も加えファイルにとじ込んでいき、「個別の指導計画ファイル」として取り扱っている。

「あゆみ」として・・・

- * 連絡カードの書式については、指導の形態ごとに書式を検討、作成中である。生活単元学習の連絡カードと同様に、ねらいや指導の手立ての方法、生徒の様子など、写真を加えて保護者が見やすいようなレイアウトや内容になるよう心掛ける。
- * 保護者に渡す時期は、単元（題材）ごとや学期ごと、前期後期など、各指導の形態ごとに考慮し配布する。

(3) 個別の指導計画へ

授業づくりを通して見えてきた生徒の変容や、ますます明らかになってきたねらい、有効な手立てなどは、また個別の指導計画を振り返る機会となった。

(授業担当者→担任)

この授業では、「地域・生活」の「教育的ニーズ」へアプローチするような場面を設定してきたので、かなり力は高まってきたよ。
 まだまだ、こういう部分に課題は残るけど・・・。

様式3 評価表

豊かな生活 に つながる力	2学期

(担任→授業担当者)

それでは、2学期の「評価」はそれも踏まえて、「B評価」にして・・・
 もう少しのところを3学期に取り組むことにしましょう。

授業を通して、生徒のこんな変容が見られたね。

様式1 教育的ニーズ集約表

	状態像	教育的ニーズ

新学期当初の「状態像」も、
 こんなふうに変わってきたね。

次は、こんな「教育的ニーズ」が
 考えられるんじゃないかな？

授業の中で、〇〇さんへはこんな手立てが有効だったね。

様式2 重点目標指導計画表

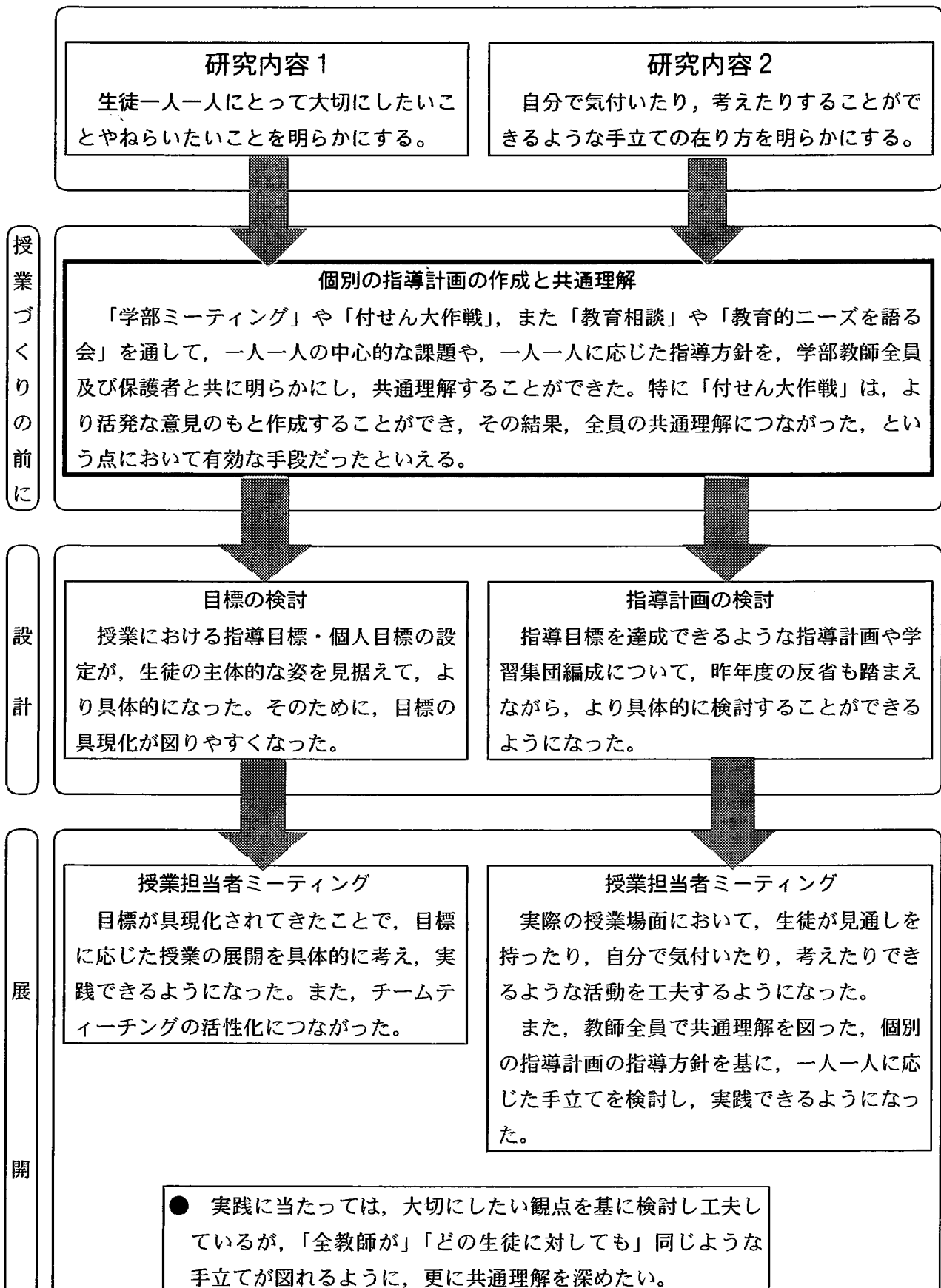
短期目標	
指導の場	
支援の 手立て	

あの手立ては、短期目標の具体的な「支援
 の手立て」にも通用するんじゃないかな。

このように授業担当者間や担任間で話題になることはあるが、現段階では、教師全員でそれらを互いに認識したり、実際に個別の指導計画へ反映させたりすることができているとは言い切れない。今後大切にしていきたい視点である。

VIII

研究のまとめ



展

授業分析やケースワーク

単元の途中で、教師全員で授業分析やケースワークを行うことで、手立ての有効性や目標の妥当性について検討し、次の授業へ生かすことができた。教師それぞれの専門性が生かされ、それを共有することができたとともに、日常的な場面でも今まで以上に、共に悩みを語り合えるようになってきた。

開

保護者との具体的な連携

目標や手立てが具体的にになってきたことで、保護者とも実際の場面を例に挙げながら、共に考え、共通理解を図ることができた。また、日常的なコミュニケーションに加え、VTR視聴や授業参観・参加などの場面設定や、教材・教具の共有など、より具体的な連携を図るようになってきた。

評

個人目標の反省

目標を明らかにしてきたことで、単元終了後の生徒の変容の把握がしやすくなり、また目標の妥当性についての評価が深まった。

授業の反省

一人一人に応じた具体的な手立てを明らかにし実践してきたことで、手立ての有効性について評価することができた。

価

連絡カード

連絡カードによる取組により、生徒の学習を通しての変容だけではなく、教師または保護者の取組方やかかわり方などについても、互いに評価することができ、次の実践場面へ生かすことができた。また、写真の掲載やファイリングにより、見やすさ分かりやすさに加えて、記録の蓄積にもつながった。これらのことから、連絡カードの作成と活用は有効だったといえる。

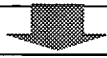
個別の指導計画へ・・・

● 単元の個人目標設定時や授業担当者ミーティングにおいて、個別の指導計画を活用することで、個別の指導計画の内容そのものが話題になることも多くなった。しかし、現段階では、全員で共通理解を図ったり、具体的に個別の指導計画へ反映したりできていないかは疑問である。よりよい個別の指導計画の作成に向けて、今後の課題といえる。

- このように個別の指導計画を生かした授業づくりをする中で、取り組んでよかったことやその成果はいくつか挙げるができる。しかし、実際の指導の充実を図るために、より有効なことを、より効率的な手段で取り組めるように、更に検討していきたい。

研究内容 1

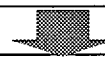
生徒一人一人にとって大切にしたいことやねらいたいことを明らかにする。



このように、生徒一人一人にとって大切にしたいことやねらいたいことを明らかにしてきたことは、生徒自身も「自分はこれを頑張るんだ」という時や場面が分かり、その意識や意欲が高まってきたといえる。

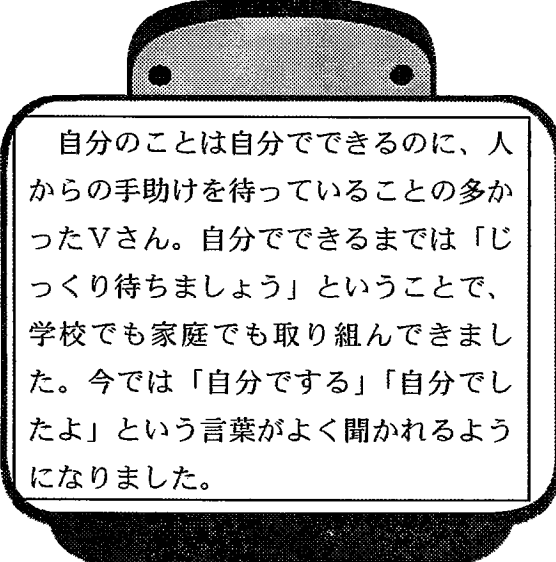
研究内容 2

自分で気付いたり、考えたりすることができるような手立ての在り方を明らかにする。

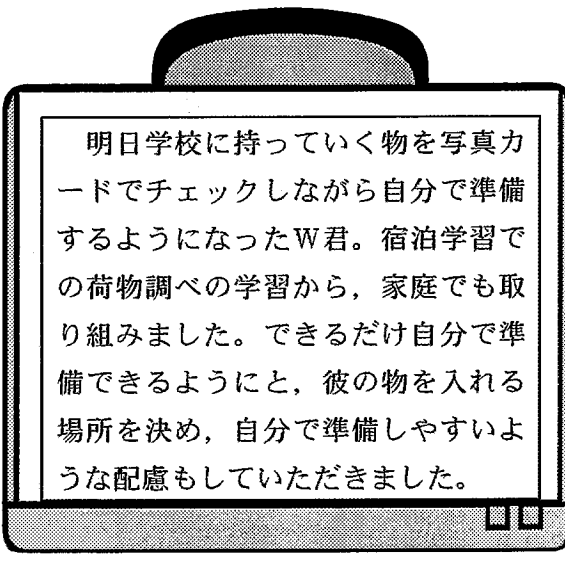


このように、自分で気付いたり、考えたりすることができるような手立ての在り方を明らかにしてきたことは、生徒自身が自分で課題解決しようとする意識を高め、チャレンジしようとする意欲へとつながったといえる。

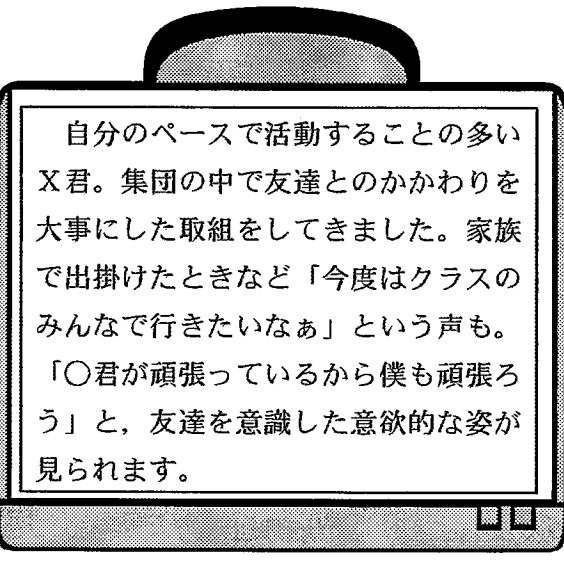
このような取組を通して、主体的になってきた生徒の姿が見られるようになった。



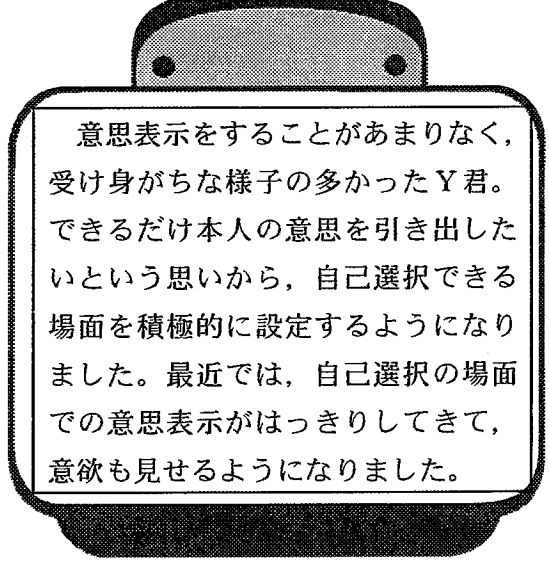
自分のことは自分でできるのに、人からの手助けを待っていることの多かったVさん。自分でできるまでは「じっくり待ちましょう」ということで、学校でも家庭でも取り組んできました。今では「自分でする」「自分でしたよ」という言葉がよく聞かれるようになりました。



明日学校に持っていく物を写真カードでチェックしながら自分で準備するようになったW君。宿泊学習での荷物調べの学習から、家庭でも取り組みました。できるだけ自分で準備できるようにと、彼の物を入れる場所を決め、自分で準備しやすいような配慮もしていただきました。



自分のペースで活動することの多いX君。集団の中で友達とのかかわりを大事にした取組をしてきました。家族で出掛けたときなど「今度はクラスみんなでいきたいなあ」という声も。「〇君が頑張っているから僕も頑張ろう」と、友達を意識した意欲的な姿が見られます。



意思表示をすることがあまりなく、受け身がちな様子の多かったY君。できるだけ本人の意思を引き出したという思いから、自己選択できる場面を積極的に設定するようになりました。最近では、自己選択の場面での意思表示がはっきりしてきて、意欲も見せるようになりました。

(文責：黒木)

資料 1

「付せん大作戦！」～短期目標の設定において～


様式2：重点目標指導計画表

氏名	〇〇 〇〇	学部	中	年	〇	記入者		担任		作成日	平成14年5月
全体像からとらえた重点目標	約束事を守り、自分で考え判断して行動する力を身に付けることができる。 ・ 忘れ物をしない。										
重点目標設定理由	本生徒は、通常のコミュニケーション面では特に問題もない。また、自分で考えて行動することができる。生活年齢が高くなるにつれて、自己の責任感も芽生えつつある。そこで、社会に出るために最低限必要な約束事を守ることを徹底し、「忘れ物をしない」ことに重点をおいていきたい。そのために、準備物のメモを取り、それを見て自分で準備することを徹底していきたい。 このことで、責任感、約束事の厳守などの力が付き、将来の社会生活につながっていくものと思われる。										
短期目標	・ 準備物のメモを取り、自分で準備すること。			・ 登校後忘れ物がないか確認し、報告すること。							
指導の場	日常生活の指導 家庭			日常生活の指導 家庭							
支援の手立て	<ul style="list-style-type: none"> 翌日に必要な物のメモを帰りの会前にノートに書き込み、担任が確認する。 家庭においては、前日のうちにメモを見ながら、なるべく一人で準備するように言葉掛けを行う。 準備がスムーズにできるように、(どこに何があるかすぐに分かるように)身の回りの物の管理をしっかりするよう学校においても言葉掛けを行う。 忘れ物をしたときの報告もしっかりできるようにする。対処の仕方が分からないときは、言葉掛けなどのヒントを出すなどする。 準備や報告がしっかりできたときには、賞賛する。 保護者と連絡を取り、共通理解を図りながら指導に当たる。 			<ul style="list-style-type: none"> 翌日に必要な物のメモを帰りの会前にノートに書き込み、担任が確認する。 家庭においては、前日のうちにメモを見ながらなるべく一人で準備するように言葉掛けを行う。 登校後、教師と一緒に忘れ物がないか確認をする。 忘れ物がある日もない日も、登校後報告するように言葉掛けを行う。 忘れ物をしなかった日や報告ができた日は十分賞賛し、カードにシールを張る。 家庭では、保護者に準備物の確認後、ノートに検印してもらう。 			<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 始めは教師と一緒に確認して「忘れ物はなかったね、よし」「忘れたね、残念」とそばで確認するくらいがいいと思います。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 忘れ物をしたとき、次に忘れ物をしないように意識を高める手立てはありますか？ </div>				
評価	<目標の到達度> B ・ メモをとることは定着しているが、家庭でそのメモを基に準備していないので、忘れ物がある。			☆ 1学期の評価で「家庭との連携がうまくいかない部分があった」とあるので、2学期の連携を高めるために、具体策(支援)があればいいのではないのでしょうか？							
	<手立ての有効性> ・ 家庭との連携がうまくいかない部分があった。 ・ 忘れ物をしたときに注意を受けることに過敏になっている面があった。賞賛をもっと多く心掛ける必要がある。						<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 帰りの会で彼が書き込んだ荷物物のノートに保護者からなつ印してもらうなどの手立てを取ってみたいかがでしょうか？ </div>				
	<目標の妥当性> ・ 保護者が一番望んでいるところであり、現在そして将来必要な力であるので妥当と思われる。										

生活単元学習連絡カード

平成 14 年 7 月 19 日
 附属養護学校中学部

○ 学校から

生徒名	中学部〇年 〇〇 〇〇	
単元名	なかまの家に泊まろう	
めあて	<ul style="list-style-type: none"> 学習計画表や日程表，教師の言葉掛けを手掛かりにして，活動に見通しを持って取り組むことができる。 言葉掛けや写真カードを手掛かりにして，入浴や荷物の準備を自分でしようとする事ができる。 	
実施期間	平成 14 年 6 月 19 日～7 月 15 日	
学習の様子		担任からのコメント
<p>入浴や調理，レストラン決めなど楽しいことに見通しを持って意欲的に取り組むことができました。また，写真カードを見て荷物があるかどうか確認しながら荷物の準備をすることができました。また，友達の様子を見て次の活動の準備をすることもありました。しかし，友達が準備した食器を自分のものとして使おうとしたり，友達が敷いた布団に寝ようとしたりすることがありましたので，少し時間を掛けてでも自分でできるように待ちました。なかまの家の掃除（トイレ掃除）は，とてもよく頑張っていました。</p>		<p>友達と一緒に楽しく参加することができました。「自分のことは自分です」ことがもう少しですね。自分でできる力は十分持っているので，その力を発揮できるようにしたいです。まずは，学校の準備（歯ブラシや体育服，タオルなど）は自分で準備してかばんに入れるように取り組んでほしいです。</p>

○ 家庭から （家庭記入欄になります。お子さんのことで御自由にお書きください。）

感想・意見等	今後、家庭で取り組みそうなこと
<p>様子の文章は手に取るように伝わってきました。 おおきパターンでおおきのおかし... (立... 和... 茶... では素直な時が少ないので私ももっとおおらかにお子様としたいです...)</p>	<p>学校や学園(あそびの丘)に行く前に自分で準備させるようにいたします。いつも親がしてました。</p>

☆ お願い

- この資料は生徒さんの生活単元学習の様子を御家庭へお伝えする資料です。取組について記録されていますので，大切に保管なさってください。教育相談等にて活用する場合がございます。
- 教育相談日までに記入して学校へ御提出ください。コピーをとりお返しいたします。

参考文献

- 安藤隆男編（2001）『自立活動における個別の指導計画の理念と実践』川島書店
- 愛媛大学教育学部附属養護学校（1999）研究収録27『主体的に生きる子供を育てる』
- 川住隆一（2002）特別支援教育No.6『個別の指導計画の評価』pp.38-43
- 鹿児島大学教育学部附属養護学校（2000）研究紀要第12集
『一人一人の子供の将来の豊かな生活につながる教育課程の編成はどうあればよいか』
- 群馬大学教育学部附属養護学校（2001）研究紀要第22集『自立・社会参加に向けて、
自ら伸びようとする児童生徒の育成』
- 小出進監（1989）『新・生活単元学習』学習研究社
- 中川修一（2002）特別支援教育No.6『個別の指導計画に基づく指導における評価』
pp.44-49
- 長崎勤他編（1998）『スクリプトによるコミュニケーション指導』川島書店
- 太田正巳編（2000）『障害児のための授業作りの技法』黎明書房
- 佐々木正美（1993）『自閉症療育ハンドブック』学習研究社
- 里見恵子編（1994）『インリアル・アプローチ』日本文化科学社
- 鈴木敏恵（2002）『未来教育全集プロジェクト&ポートフォリオ評価』
<http://www.suzukitoshie.net/2001/index.html>
- 竹田契一・佐々木正美・青山均監（1995）『自閉症のコミュニケーション指導法』
岩崎学術出版
- 鳥取大学教育地域科学部（2001）研究紀要第18集『「生活を楽しむ子」をめざして』
- 全国知的障害養護学校校長会（1999）新しい教育課程と学習活動Q&A知的障害教育
東洋館出版社